

令和元年度 第2回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和元年10月11日(金) 午後1時30分～午後3時30分
 - 場所 市役所南庁舎5階 南52会議室
 - 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略)
小木曾祐子、加納勝彦、坂本耕二、杉山浩子、鈴木覚、鈴木啓郷、土井幸治
中田繁美、西原香保里、牧野篤、湊裕、山村史子
 - 欠席者 なし
 - 事務局 生涯活躍部 田中茂樹、清水章
市民活躍支援課 濱田孝光、松井俊幸、宮川恭子、前田裕樹
-

次第

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 議事
豊田市の高齢者の活躍支援について
- 4 生涯活躍部長あいさつ
- 5 閉会

■ 議事 豊田市の高齢者の活躍支援について

【 委員意見 】 (要約)

- A 委員 今年度の生涯学習審議会、今回で最後となる会である。最近の話題といえば、老齢年金の引き上げなどが検討されていたり、2030年には、今ない職ができ、今ある職の半分が自動化され、人を雇う機会が減ると言われている。
- 少子高齢社会や人口減少社会をどうするかと言われる中、この生涯学習審議会では、豊田市の高齢者が社会で活躍できる仕組みを作り、社会に出ていき、支えていく。高齢者が世間に感謝されるような仕組みを考えていきたい。
- 事務局 資料の説明
- A 委員 資料の説明を聞いたうえで、質問・意見ある方はいるか。
- B 委員 A 委員の話から、世間では、老齢年金の引き上げが話題になっているということは、高齢者に働くことを勧めていると感じる。豊田市の第8次総合計画は5年から10年の計画だと認識している。10年経つと職業が変わり、20年経つと人生観が変わる世の中になった。その中で当面は第8次総合計画で対応できると考えるが、今後、定年の延長や再雇用の推進により、例えば、75歳まで働くことが当たり前の世の中になった場合、自治区で活躍する人はいなくなってしまう。現役時代から、地域貢献を考えることも必要になるかもしれない。そういう時代に対応するために豊田市、日本はこうしたことを想定して対応策を検討し、推進していかなければいけないと思う。
- 資料の中であった「プロボノプログラム」「パラレルキャリア」について、詳しく聞きたい。
- 事務局 プロボノとは、専門知識や職業上得た知識を活かしたボランティア活動のことである。例えば、仕事で得た知識をNPO活動で生かすことが挙げられる。また、パラレルキャリアは、仕事をしつつ、並行してボランティア活動などいくつかのステージで活躍する人生を考えていくことである。
- A 委員 仕事だけの人生でなく、他のことも経験していけるような社会づくりを考えるということ。これからの社会を考えると、就業について、雇用関係にあるのではなく、業務委託関係になるのではないかという議論がある。例えば、月曜日、火曜日、水曜日は大学教授で木曜と金曜は会社員といった働き方が出てくる可能性がある。並行していくつかの活動をすることがパラレルキャリアと言える。
- C 委員 高齢者の就労について、健康であれば、80歳、90歳でも働ける環境を

作るということか。それとも年齢を設定して、考えていくのか。

●事務局

高齢者の就労について、年齢の設定を想定していない。元気で働きたいというニーズがあるのであれば、対応できる仕組みづくりをしていきたい。

○D 委員

豊田市シルバー人材センターでも、年齢の上限は設けていない。最高齢では、94歳の方が現役で就業している。

○E 委員

高齢者クラブにとって、高齢者の就業者増が高齢者クラブの新規会員減少の一因と考えられ、現状は年々、運営が難しくなっている。一方、見方を変えればこの審議会で議論してきた高齢者の活躍支援が有効に機能し高齢社会への対応が進むと言うことは単純に高齢者クラブ員の減少を負と考えるのはいけないと思えてきた。

高齢者クラブでは友愛、健康、文化、地域支援などの事業を通して高齢者の相互支援を行っている。個人的意見として、多様化する高齢社会にクラブ員の枠を超えた社会貢献の一翼を受け持つ集まりとして発信出来るようになれば良いと思う。

○A 委員

既存の団体、組織は地縁と年齢で区切られている部分が強。今までのように一斉に退職するのではなく、働きたいところまで働くことになる。団体はそういった社会を意識して、活動していくことになる。

○F 委員

高齢者の活躍支援を考える際に就労、生涯学習、社会貢献の区分けに違和感を覚える。学びと活動を分けることは難しく、セットで考える方が分かりやすいと思う。

○G 委員

市別の高齢者の求職数が岡崎と豊田が多いが、これは自動車関連の会社が多いことが起因する数値なのか。

●事務局

数値の根拠を会社ごとに分析したわけではないので、そう言い切ることはできない。

○G 委員

資料に書いてあることは全て納得できる。疑問に思うのは、具体像が見えにくい。例えば、パラレルキャリアの話について、納得できるが、どう進めていくか分からない。自動車産業は100年に1度の危機と言われている。働く者の環境が変わっていく。現役世代はそういった環境の変化についていくのに精いっぱいになるのではないか。そういう社会変化の状況でパラレルキャリアをどう推進していくか。

自分が定年退職したころは退職後の金銭の話ばかりであった。例えば退職者説明会でパラレルキャリアの話をしたらどうか。このようにアイデアがあれば、教えて

ほしい。

●事務局

資料4のとおり、交流館と学校を核とした地域作り事業を考えている。地域学校共働本部があるため、防犯パトロールや読み聞かせのように学校を地域に広げて、少しでも活躍できる場を用意したい。そのようなきっかけから、市民活動を広げていきたい。

○H 委員

豊田市の交流館で特徴的なのが、コミュニティ会議の事務局を交流館が担っていることだと思う。コミュニティ会議といった地域の課題解決する場に、最初は自治区から充て職で出席した人もコミュニティ会議の中で活動することにより、新しい人との出会いや役に立つことで生きがいを見出し、その後も地域活動をする人がたくさんいる。その入り口を交流館が担っている。既存の取組として紹介してほしい。

地域の役員を担う主体は高齢者だが、役員の中には、現役世代の方もいる。地域で活躍する高齢者を見ることで、今後も貢献したいと思っている。現役世代が地域活動に関われる社会になるといい。例えば、会社として、地域での活動を評価する制度がうまくできれば、地域の担い手不足解消の一手になる可能性もある。

○C 委員

生涯学習がベースにあって、就労、生涯学習、社会貢献を考えるので、別々に考えるのは考えづらい。今年のテーマは高齢者の活躍支援ということだが、例えば、地域学校共働本部は高齢者の活躍の視点だけでなく、子供の学びという視点もある。学びを中心に、生涯学び続ける社会を意識し、就労も社会貢献も一つの学びだと考えるのが生涯学習である。

○F 委員

学びイコール知識が増えると思われがちだが、そうではない。創造なども含む大きなくりでの学びだと思う。資料を読むと、知識が増えることが学びだと思われるので、大きなくりでの学びを意識した資料にした方がいいと思う。

●事務局

F委員の言う通りだと思う。資料では、ジャンルで分けているが、そうではない。豊田市の学びもたくさんあり、シニアアカデミーのように学んだことを実践につなげることを意識しなければいけないと思っている。3つに区切るべきではない。交流館のふれあいまつりではシニアアカデミーで学んだことを生かしている人がいた。学んだことを社会貢献に生かしてもらえるといい。

○A 委員

既存の施策から、資料ではジャンル分けをしているが、自分たちで自分たちの地域を作るというの学びのひとつといえる。それが広がることで事業の基盤ができると思う。豊田市は交流館が各中学校区に一つずつあり、地域課題解決の拠点になっている。高齢者クラブは様々なジャンルで活動している。その中で高齢者

の活躍を考えることができると理想である。

○I 委員

8月の広報とよたで認知症予防講座の紹介があり、受講した。特殊詐欺もある中で行政が情報発信すると安心感がある。情報提供することでシニア世代が興味を持つ情報発信を行政に期待する。

講座を受けた後、地域で何をやればいいのか分からない。その後の講座があると、有効だと思った。

中学生が図書ボランティアに来た際、その姿を見た地域の方が中学生に声をかけ、多世代交流の有効性を実感した。自分自身、図書ボランティアとして、活動しているが、そういう姿を見ると、もう一度学ぶ機会があってもいいと思う。

現在、活動している人を対象とした学びの機会の提供があってもいい。そこに力を入れると需要はあると思う。

○F 委員

ボランティア活動を始めると、その活動の中でいろいろな矛盾に気付くことがある。ボランティアという立場は、与えられた環境で活動することが多く、自分の意見が言いづらい。そういう環境が続くと、せっかく気付いたことも言えなかったり、学んだことが生かせなくなってしまう。市民による活動は、場合によって行政と対立することもある。価値観のぶつかり合いは市民活動にはつきもの。そのようなぶつかり合いを建設的に生かしていくという視点がないといけない。

○J 委員

働く年齢が上がると、自治区や地域を担う人がいなくなってしまう。この状況がここ数年増えている。自治区に行政からの依頼が多い。例えば、民生委員の一斉改選の際、20名近くに声を掛けたが、全員に断られた。

●事務局

これだけ社会構造が変わっているのに、自治区の構造も変わらなければいけない。これは課題だと思う。

○J 委員

住民の自治区への意識も変わってきているので、変わらなければいけないと思う。

○K 委員

現役世代の問題として、親が認知症になることや介護が必要になった時、仕事を続けられず、退職せざるを得ない状況がある。会社の制度はあるが、体力的、精神的に耐えられない現役世代もいる。こういう社会で高齢者がいる中でみんなが活躍して、生きがいを持って市民活動が行える施策を行政に期待する。

○A 委員

生涯学習を基本とした社会づくりを考える際、高齢者の就業の視点で考えたらどうか。

- D 委員 定年退職し、精力的に地域活動している高齢者に話を聞くと、現役時代から地域活動を行っていたという。現役時代が延びるとシルバー人材センターも高齢化する。シルバーの派遣事業で小売店に勤務する人は高齢だからといって仕事が減ることはない。効率性を高齢者に求められるようになると厳しい。
- 最近、地域のお祭りの手伝いという仕事の依頼があった。地域の担い手不足を実感した。
- 資料1の市民アンケートの中で高齢者の社会参加を推進する取組で「体験」が最も多かった。これを受け、シルバー人材センターでは、いきなり入会促進ではなく、体験会のようなきっかけを提供できないかと思った。
- 顧客の獲得のため、新たにふるさと納税の返礼事業を実施し、やりがいを見出す予定である。ハローワークとの連携として、今日の午前中、ハローワークでシルバーの紹介を行ったところ、6人が興味を示してくれた。継続してきっかけ作りを行っていきたい。
- L 委員 目指すべき姿として、「地域発の困りごと解決」とある。これを高齢者に求めるのは求めすぎではないか。審議会でボランティアという言葉を使うと安価な担い手のイメージがある。すべての取組を高齢者に期待しなくてはいけないのはいかがでしょうか。
- A 委員 みんなが同じように退職して、同じように年金もらう時代ではなくなった。社会が複雑化している。今までは住民が行政に依存していた。今後は課題や問題を自分事にしないといけない。自分事と意識させる施策がないといけない。今までは潤沢な税収があった。それで行政サービスを提供していたが、今はそうではない。住民自身がまちの主役であることを意識してもらわないといけない。高齢者の活躍支援というテーマだが、多世代との関わりが必要だと考える。
- B 委員 豊田市内の全小中学校で地域学校共働本部を設置するという方針であると聞いた。地域の活動が子供たちの活動に幅が広がったことは事実としてある。ただ、交流館で行った活動をすべて教育現場に落とし込むわけにはいかない。学校現場が必要としていることとのマッチングが必要。今後、必要になると思われることは英語と道徳、プログラミング学習の分野である。そこにサポートティーチャーとして、入ってもらって教育現場としては助かると思う。同じサポートティーチャーでも、教育委員会に登録すると、有償、学校共働本部を通すと無償のボランティアになる。整合性を保つために各機関が連携する必要がある。これは一例だが、あらゆる事例から課題を把握し、各学校の現状に沿った活動を支援してほしい。
- F 委員 地域講師に対する学校側のニーズとは合っているのか。
- H 委員 学校からの依頼により、交流館から小学校や中学校に講師を派遣している。今後は地域学校共働本部ができるため、例えば、英語のサポートが足りないとい

うニーズを把握できれば、そのためのステップとして、交流館の講座として、用意できることが検討できる。募集をする段階で具体的な活動の姿を提供して、人材を発掘していくことができるとよい。

○F 委員 地域講師に登録しても、なかなか声がかからないと聞いたことがある。これはボランティア登録と似た部分がある。学校がどうサポートしてほしいかとサポートする人がどう関わりたいかをマッチングしないと地域づくりの変革にはならない。

○A 委員 地域学校共働本部のほかに、多世代交流のきっかけになることはないか。豊田市内の小中学校をどう活用するか。地域の学びの場となることを検討してもいい。高齢者から学ぶだけでなく、子どもたちからの働きかけ、声かけもあっていいと思う。

今の小学生は忙しく、カリキュラムは授業のみでは難しいため、地域と一緒にカリキュラムを消化してほしいが、なかなか現場まで伝わらない。

○C 委員 日本の高齢者は子どもたちから尊敬されない。高齢者が生き生きするには、周囲の人から尊敬され認められないといけない。子どもたちと関わる場があり、高齢者が子どもから学ぶ機会もないといけない。生涯学習を考えたときに、子どもから見る高齢者を考えて、生涯学習施策を検討しなければいけない。これからの時代、知識はネットや端末が教えてくる時代となる。そこに負けないのが「関わり」である。関わりが生まれるような環境が整えられるとよい。

○H 委員 ある地域では、川のクリーン活動があった。20年以上続く取組で、3,000人近くが参加した。その活動の中では、ある場所に中学生全員を集めて、活動した。川の生物観察をするところで地域の方が見守りをしている。地域の川について、子ども達が地域の人に質問をする。それに地域の大人は一生懸命答える。大人たちは子どもから聞かれても、自分が地域のことを知らないことに気づき、交流館で歴史について学ぶ講座のリクエストがあった。

そういった多世代交流によつての気づきが学びになると実感した。

○F 委員 子どもと関わることを考えたときに親との関わりを欠落させてはいけない。多世代交流を考える際に、子どもの親世代との関わりを気を付けないといけない。親世代が学ぶ機会を提供しないと子どもとの関わりは難しい活動になる。

●事務局 地域学校共働本部を考える際に親世代とのコミュニケーションを図り、子ども世代との関わりを考える。ある地域では、里山があり、高齢者がノコギリを使う姿を見て、子どもは尊敬する。高齢者はそれが生きがいになる。今後は受け皿を意識した施策を考えている。その一つが地域学校共働本部になると考えている。